

銀座の屋上農園も菜の花が咲き始め、まもなく養蜂シーズンがやって来る。屋上養蜂をはじめ以前「銀座が環境にやさしい街」という発想は誰にもなかったろう。私たちは街の皆さんに蜜蜂が受け入れられると「田舎のミツバチ達は、農薬散布の影響で厳しい状況に置かれることもあるが、銀座のミツバチ達は皇居や公園を蜜源として農薬の心配もなく安心して蜂蜜を集めてくる。銀座は人にも蜜蜂にもやさしい街だ」というコメントを取材時に言ったことを記憶している。中央区役所の公園緑地課の担当者も街路樹の害虫駆除のため殺虫剤を散布するときは事前に連絡をくれて、蜜蜂への被害がないように配慮してくれた。

ミツバチ目線で緑の街を⑧



そうした中、アメリカで蜂群崩壊症候群(CCD)が発生すると、日本でも蜜蜂の事故と農薬の因果関係を強調した農薬反対の環境活動家が登場した。当初、私も養蜂家として「農薬は可能なら減らしていくことが望ましい」と思い賛同していたが、「農薬反対のキャンペーンでは何も解決しない」ことに気が付き距離を置いた。実際に農林水産省の統計でも農薬を使用しない有機栽培農家は農家全体の0・2%でしかない。これは日本の農業は農薬がなければ成り立たないということだ。

その一方で蜜蜂や昆虫関連の研究会に参加すると農薬使用の例でよく取り上げ

大都会でも田園地帯でも 人と人を繋ぐ役割果たす

NPO法人銀座ミツバチプロジェクト 最高顧問 高安和夫

事業紹介

NPO法人銀座ミツバチプロジェクトは、2006年3月から銀座のビルの屋上でミツバチ飼育を開始。ホテル、レストラン、百貨店など銀座の老舗と連携したハチミツ商品づくりや屋上緑化、地域の生産者との交流事業を通して街の活性化に貢献。平成22年6月環境大臣表彰。平成24年4月農林水産大臣より「食と地位の『絆』づくり」選定を受ける。

史を誇る。50年の歴史を誇る。50年の歴史を誇る。

られる苺栽培でも、近年、天敵昆虫(苺に着く虫を食べてくれる)の使用により、農薬使用量がかつての半分以下だという。苺農家は受粉にミツバチを使うので蜜蜂が元気に活動できる環境を望んでいるのだ。また、大学の研究者に聞いても「日本ではアメリカのCCDのような状況は発生していない。開発等による蜜や花粉源植物の不足と、病害虫の方が問題は深刻だ」という。岐阜県垂井町春日養蜂場の春日住夫氏は、農薬の影響で蜜蜂が減っていると訴える養蜂家の技術不足を指摘する。今年1月、春日さんの招きで養蜂場を訪ねた。新幹線を通ると徳川家康陣屋跡の看板が目に入る。垂井町は伊吹山と養老山に挟まれた平野で水がきれいなことで定評がある。当然、お米も美味しい。春日養蜂場は先代が豊かな自然に囲まれたこの地で養蜂をはじめ、50年の歴史を誇る。



春日住夫さん(左)の説明を聞く筆者(岐阜県垂井町の春日養蜂場で)

以前は一面の水田にレンゲの花が咲き誇りレンゲ蜜は自慢の蜂蜜であった。近年は田植えの時期が早くなり田んぼにレンゲを植えなくなったためにレンゲ蜜は採れないそうだ。早速、養蜂場に案内してもらおうと、そこは水田に囲まれた里山の入り口だ。「高安さん、見てください。隣は田んぼでしょ。夏にはラジコンヘリで農薬撒きますよ。それでも私の蜜蜂に被害はない。仮に、被害が出たときは農家と相談して農薬の種類を蜜蜂に害が少ない物に変えてもらいます」。稲作農家も養蜂家も長年この地域で暮らし、地域を支える仲間だと春日さんは言う。そして、いま里山の再生活動で地域の農家の皆さんと耕作放棄地に蜜源となる植物や花を植えているそうだ。ここでも蜜蜂は地域の人と人をつなぐ役割を果たしている。